

# 天草一町田方言における敬語法

松 本 美 恵

## 目 次

|                |            |
|----------------|------------|
| 序 論            | 本 論        |
| 第一章 用言に関する敬語法  |            |
| 第一節 尊 敬 法      |            |
| (1)、ナス         | (2)、ス、サス   |
| (3)、ル、ラル       | (3)、尊敬法の諸相 |
| 第二章 謙 讓 法      |            |
| (1)、モース        |            |
| 第三節 丁 寧 法      |            |
| (1)、ゴザス        | (2)、ヤス     |
| (3)、デス         |            |
| 第二章 体言に関する敬語法  |            |
| (1)、名詞         | (2)、代名詞    |
| (3)、接尾辞        | (4)、主格表現   |
| 第三章 文末詞に関する敬語法 |            |
| 結 論            |            |
| 参考文献           |            |

## 序 論

天草<sup>いちぢょうた</sup>一町田方言における、敬意表現法を觀察、把握しようとするのが、本稿の目的である。

ここでは、その一部である次の項をとりあげることにする。

第一章……第二節謙讓法 モース

第二章……(1)名詞 (2)代名詞 (3)接尾辞

研究対称地としての一町田は、「離島」天草下島の中部に位置し、天草方言として純粹なものをもっていることが多い。しかも、筆者自身生まれて以来中学一年までの十三年間過ごした土地であり、知人も多く調査には便利であった。

調査は、昭和四十一年九月から四十三年八月までの延べ三十日間にわたっておこなったものである。(注、三月に7日間、五月に3日間、七月に14日間、八月に3日間)、いろいろな場における自然対話を、敬意表現に関するものに注意しながら書きとめたカード一、八〇〇枚余をもとに考察をおこなった。敬意表現は中年以上それも老人に多いので、老人による対話に特に注意し、二、三人での対話は、録音テープにおさめた。そのおもな方言資料提供者は次の

六人である。

|    |       |   |     |       |     |     |
|----|-------|---|-----|-------|-----|-----|
| 今村 | 松本    | 庸 | 74才 | 谷     | ヤスヨ | 49才 |
| 路木 | 松川次郎造 |   | 67才 | 松川    | 一二  | 46才 |
|    | 太田カヤノ |   | 72才 | 酒井マサノ |     | 70才 |

一町田は旧天草郡一町田村のことで、現在河浦町の中心地である。(注、昭和二十九年に三ヶ村合併して河浦町となる)また、一町田は古く鎌倉時代から、天草でも指折りの地としてまとまった集団であったといわれる(注、山口修「天草」)が、天草の中心地が本渡となった現在、本渡、牛深間の陸路上の中継地として重要な位置をしめている。だいたい南北に通っているバス路線にそって14の部落があり、中でも平野、倉田、中村、下田が一町田の中心部である。このあたりには、河浦町役場をはじめ、公共の建て物や、商店が集まっている。

以下一町田における、人口とその動態、職業、文化現象は次のとおりである。

a、人口とその動態

人口は、四八二〇人で、河浦町の42%にあたる。昭和三十九年に、一町田にあった炭坑が閉鎖されたため二〇〇人ほど減少した。出稼は毎年三十人ほど東京、大阪、瀬戸方面へ行く。また河浦中学校での卒業後は、進学者60%、就職者30%、家に残る者10%であるという。やはり青年の流出はここでもみられる。

買い物については、日用品などすぐに入用なものは、各部落の店で購入するが、衣料品などは次のようにさまざまである。

|                      |       |
|----------------------|-------|
| 一町田の中心部の商店(中村、平野、倉田) | 35.6% |
| 本渡の商店                | 39.2% |
| 牛深の商店                | 2.5%  |

河浦町の農協……………11.0%  
他地区……………12.0%

一町田の中心地域で買わない場合はほとんど本渡で済ませるが、天草五橋の開通した現在、熊本市へ出かけて買う人も多くなっている。

b、職業

農業が主で、他の職業であっても、農業と兼業の場合が多い。

|          |     |                 |    |
|----------|-----|-----------------|----|
| 農業……………  | 52% | 公務員(兼農業)……………   | 4% |
| 公務員…………… | 11% | 大工、左官(兼農業)…………… | 4% |
| 商業……………  | 7%  | 鉱員(兼農業)……………    | 6% |
| その他…………… | 13% | 出稼(兼農業)……………    | 3% |

c、文化現象

全体的にみて文化程度は低い。これは交通が不便であることも大きく左右しているようである。しかし、現在、テレビなどの普及その他で、少しはよくなりつつあるといえる。(注、テレビ87%、ラジオ66%、新聞44%)方言についても、その影響で変化がみられることも多い。中年以上についての学歴は、義務制学校81%、上級学校19%といった状態である。

なお、宗教については、仏教がほとんどである。(注、浄土宗58%、浄土真宗32%、禅宗4%、その他6%)

本 論

第一章 用言に関する敬語法

第二節 謙 讓 法

(1)、モース

一町田方言には「モース」という謙讓法がある。現代語に「申

す」「いたず」「まいる」「おる」「うかがう」という数種しかない謙讓語であるが、当方言においては「モース」だけが顯著である。

「モース」は男女の別なく老人におこなわれる。教養のある人として待遇されている老・男の訪問をうけて、老・女は次のように言う。

○ワンドンガ ゴタットノ アイモーシタツチャ、私みたいな者が、お会い申したとて、(老・女↓老・男)

また、筆者の小さいころ、よく家に訪ねて来ていた老女は久しぶりに会った筆者との別れに際して

○マーダ アイモーシタランゴテ ゴザスバツテ マータ キナシ タトキヤ アワシエ モーシテ クダツシエ。まだ会い足りないようにございますが、また今度いらっしゃったときは、

おじゃまさせていただきます。(老・女↓青・女)

と言った。そして、この老女は亡き夫のことを思い出しながら、

○コガンメオーテ シモーシトツタツジャツト、こんなにまで苦勞して、つくしておりましたんですよ。(老・女↓同)

と語っていた。この人のひかえ目な態度が、多くの人に「モース」謙讓語を連発させるのである。すると同席していた老女も、頼まれごとを受けたことを、

○オガン ハナシモーシテエツ クレナチュエモン ジャッデ。

そのようにお話し上げておいてくださいと言うものですから。(老・女↓同)

と「モース」謙讓語を使っていた。主として老年男女におこなわれるが、頻度は稀である。

ところで、この「モース」謙讓語は長音にならないで、「モス」

となることも多い。「モース」よりいくらか敬意は下がるようである。「モス」は未然形、仮定形、命令形に多い。したがって「モース」と長音になってあらわれるのは多くの場合、連用形である。第三者のことを、

○コリバ アゲモシエバヨカッタ。これをさしあげればよかったです。

○ミチャオラレン ツクツテ クレモソイ。だまって見過ごしてはいられない。(畑を)代作しておあげしよう。(中・女↓老・女)

○ウメジヨーチユナット モツテイタツ クレモソゴテ ウレシカッタツ。梅酒でも持って行ってさしあげたいほどにうれしかったのよ。(老・女↓中・女)

○モーチナット ヤーテ アゲモシエ。餅でも焼いてさしあげなさい。(老・男)

「モース」謙讓語は、中年以上の男女それも女子に多くおこなわれ、敬意は上か中の上である。同等またはそれ以上の人に対して使われる。年令的には下であっても、相手が敬意をほらうべき人であれば使われる。中年以下ではほとんど使われることはないが、ただ筆者の小学校時代に同級生の女子で使っていたのを思い出す。地域的な差があつたらうか。久留、白木河内といった部落のなかに使う人がいたようである。

## 第二章 体言に関する敬語法

(1)、名詞

名詞においては、当方言にも普通名詞に「お」「御」をつけた「オメシ」「オサヨ」などの敬語法がみられる。しかし、ここでは

父母などの呼称について、取り上げることにする。(注、「天草の方言」——昭和三十三年発行——を参考にする)

父母の呼びかたも、家によってまちまちではあるが、だいたいの基準を認めることができる。一町田でおこなわれる父母の呼称には、十とおりほどある。中でも一番上品だとされ家柄のよい家と言われるのが「オトーチヤマ、オカーチヤマ」である。ちよつと下がる、「オトーチヤン、オカーチヤン」「オトツア、オツカチヤン」と言う。最も一般的な呼称は「トーチヤン、カーチヤン」である。「トトサン、カカサン」も言われるが少ない。ずっとくだけた言いかたとして、「トト、カカ」「トン、カン」があり、だいぶ下品にきこえるものである。だから、人によっては八向カッツツテワ失礼ジャツデ言わないようである。肉親である子供は父母に向かつて、「トト、カカ」と言うが、他人がその子の父母に「○○ガエントト(カカ)、コリバシテクレナ。」(○○のお父さん(お母さん)これをしてください。)とは言わない。「チャン」は、父の呼称で「トーチヤン」の省略形と思われるが、上品なものではない。目上の人がこの人のことを言うとき、「どこどここのチャンな」と使うこともある。目下の人が目上の人に「オトトサマ」「オカカサマ」と言うのは、最も敬意のある言いかたである。

また、祖父、祖母を含めての老人の呼称も父母の場合と似ている。

オジーチャマ——オジーチャン——オジジ——ジューサマ——

オバーチャマ——オバーチャン——オババ——バーサマ——

——ジューサン——ジジサン——ジサマ——ジャン——ジジ——

——バーサン——ババサン——バサマ——バヤン——ババ——

右は上品な言いかたから順に並べたものである。このうち、ふつう程度の言いかたは、「ジューチャン、バーチャン」で、他人は「オジジ、オババ」か「ジサマ、バサマ」を使う。「オジジ、オババ」のほうが、「ジサマ、バサマ」より敬意が高く、目上に対する言いかたである。以前はこれらの言いかたが頻繁におこなわれていたのであるが、現在はだんだん単一化しているようである。

そして、息子を含めた青年男子ぐらゐまでの総称として、当方言に「アボ」がある。「アボ」については、田中正行氏がふれておられる。(注「熊本県方言風土記」P、98)

ここでは、「アボ」の使われかたをみることにする。中学生の男の子が停留所で、

○アヨー アンアボガ。(やあーあの子ったら。)

と、小学生の男子の動作がおかしいのを見て、からかい気味に発した。子供どおしであっても、目下の者が目上の者へ直接「アボ」とは言わない。「アボ」は、他家の息子(とくに兄のほう)；下男をいうが、おとなが幼児に、

○アボシャンニクレロ。(お兄さんにあげなさい。)

と言った。「シャン」(注、「シャン」については後述)がつくと、かわいらしい感じで、「お兄ちゃん」ほどの意となる。「アボサン」「アボドン」となると、おとなに近い男子に使われるが、あまり上品な呼称とはいえない。「アボ」は使う人もだんだん少なくなっている。

## (2)、代名詞

人称代名詞は、当方言で次表のようなものがある。

| 一人称                                      | 二人称  | 三人称                                    | 疑問代名詞          |
|--|--|--|----------------|
| オリ<br>オル<br>オレ<br>オレン<br>オー<br>オツ<br>オン  | ワリ<br>ワル<br>ワレ<br>ワレン<br>ワー<br>ワツ<br>ワン        | アンワリ<br>アンワレ<br>アレイン<br>アー<br>アツ<br>アン | ダリ<br>ダー<br>ダッ |
| スシ<br>ン<br>ワীগ<br>ワタシ                    | ウ<br>オマエ<br>オドリ                                |  |                |
| オッドミ<br>オッドン<br>オドミ<br>オドン<br>オドミ<br>ンドン | ワッドミ<br>ワッドン<br>アータチ<br>アンタチ<br>アンタガタ<br>アンタガタ | アノヒト<br>アンフト<br>アンマレ<br>ホンマレ           |                |

一人称でいちばんよく使われるのは「オリ」である。

○ワリガフトリデ イコヨリヤ **オリモ** クーワイ。おまえがひとりで行くより、わたしもいっしょに行つてやろうよ。(老・女↓青・女)

女↓青・女)

老若男女ともによくおこなわれるもので、品位はふつう程度の言いかたである。「オル」「オレ」「オレン」は、発せられた音に微妙な違いがあるが敬意はほとんど変わらない。「オー」「オツ」「オン」は、いづいぶんくだけた言いかたで、後につづく語によつて使われられる。親しい間がらでの対話に聞かれる。

○オーガタネ イマムラマデ 20エン ジャツタ。ぼくのはね、今村まで20円だったよ。(小学生・男↓同)

○オッチャ カカリキツ ジャ。ぼくもさわられるよ。(小学生・男↓同)

○オンネー。(野球の打順で次の番は)ぼくだねー。(小学生・男↓同)

このように男の子の間でよくおこなわれる。

「オッドミ」「オッドン」などは八おれたちVであつて、やはりふつう程度の言いかたである。「ワタシ」はあまりおこなわれない。しかし、小学生の女子が遊びの中で次のように言っている。

○ワタシガ アンタニ コリバヤツデ、わたしがあなたにこれをあげるから。(小学生・女子)

これは何かちぐはぐな感のする使いかたである。学校でやっとおぼえた共通語の「ワタシ」を、このようなままごとの場において使っている。使いかたとしては、当方言社会にそぐわない、きどつた言いかたである。共通語の侵入に対して、方言社会の受け入れは、なかなか簡単でないものがあるようである。

二人称では、目上の者から目下の者へ使う代名詞が「ワリ」である。さきの例、

○ワリガ フトリデ イコヨリヤ **オリモ** クーワイ。(老・女)

では祖母である老女が孫娘に言っているのである。男性であったら、同等に、

○ワリヤ 10カイ イッタコツ アットチユネ。君は10回行ったことがあるんだってね。(小・男↓同)

と使う。女子であったら、同等の相手には使わない。おとなが子どもなどへは使う。

「ヌシ」「ウ」「オマエ」「オドリ」はきわめて敬意の低いもので、現在はけんかする時とか、怒った時などに、ときどき発せられる。

○ウナ ナンバ ショットカ。おまえはいったい何をしているんだ。  
だ。

○オドリヤ ウッタタカルツザン。畜生めが、ひっぱたいてくれるぞ。

実に激しい言いかたで、後者の例など最後の「ザン」文末詞とあいまって、聞いていて飛び上がるほどの語気で言われる。

「ワッドミ」はへおまえたちVである。

○ワッドメ サスルワイ。おまえたちにさせるよ。(中学生・男↓小・男)

これは「ワリ」に対応する言いかたで、あまり上品ではない。

「アータ」は敬意の高い代名詞である。おとなによくおこなわれるもので、子どもは「アンタ」を使う。おとなは、また、「アンタ」とともに「アタ」も使う。敬意は「アータ」「アンタ」「アタ」の順に低くなる。そして、これらが間投詞のようにおこなわれることがあり、その場合は同じ順に、代名詞としての機能が減る。

「アンタ」「アンタチ」はいずれも目上の人に対して使ってよ

い。女子は同等にも、それ以上にも使う。「アンタガタ」は「アンタチ」よりも敬意の高い言いかたである。

○アータガタ マワサシタコツ アッデスカ。あなたがたは、自動車運転なされたことがありますか。(中年・男↓同)

のように使う「アータガタ」の「ガタ」は、敬意をもつ人たちを総称して言うのであって、この場合は、同輩でも話し手には敬すべき人であるから使っている。

三人称「アノヒト」「アンプト」はいずれもへあの人Vのことであるが、「アンプト」のほうが敬意は低い。

(3)、接尾辞

敬意表現においては、敬称にも見過ごせないものがある。

「熊本県方言風土記」(201頁)には(注、田中正行氏による)、  
本県の方言の敬称について言えば、サマ、サン、シャン、ヤン、

ドンの順序になる。(後略)

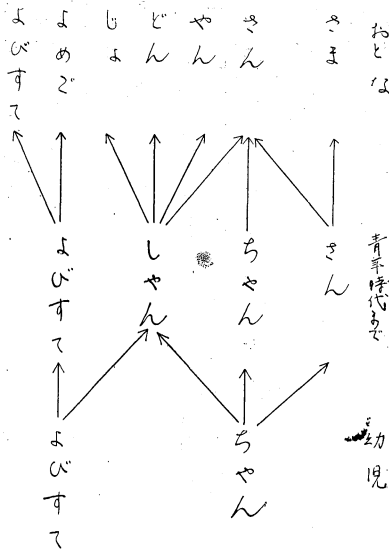
とある。当方言においてもこの順序は認められるし、これらのどれをも、頻度の差はあれ使っている。

しかし、敬意、使用状態において、一律にこれだけでない点もある。もう少しくわしく考察してみることにする。敬称のおこなわれかたをみるために次の作業をおこなった。その結果をもとに考察をおこなうことにする。

河浦町大字今田(今村)の選挙人名簿にしたがって、それらの人や、その家族全員について敬称を聞いた。なるべく多数にあたるようにするため、ずっと今村で生活して村のことにくわしい老女から記憶にある敬称も聞くことにした。その数は延べ400人余である。また、現在の使いかたに筆者の認識ちがいがあってはいけないので、

やはり土地の青年女子一人にも意見を求めた。一部落のものではないけれども、一町田全体についていえると思う。(注、老女は、昔でいえば地主の女主人。尚、現在の今村の戸数は75戸。うち、元庄屋1戸、元地主8戸、その他は元自作か小作)

敬称で現在一番よくおこなわれているのは、子どもは「チャン」でおとなは「サン」「ジョ」である。これらのほかに、子どもにも「○○シャン」と言ったり呼び捨てにすることがある。おとなで中年老年の婦人に、「○○のヨメゴ」ということがある。そしてまた、その老女の若いころは「○○ヤン」の敬称もあったという。現在、後者はあまり聞かない。敬称は多分に年令と関係している。だから敬称の敬意にはそれぞれのことばの歴史的な流れと、その社会的背景をも含まずには考えられないものがある。敬称についての関係を図系すると次のような図になる。



現在、子どもに使われる敬称「チャン」は、昭和のはじめころにはほとんど言われなかったという。そのころの子どもには「○○シャン」と言われていたらしい。そういえば昭和三十年ころまでは「シャン」がまだちらほら聞かれた。現在の子どもには、あまり言われない。だとすると、「シャン」が以前はさかんに言われていたのに代わって、現在は「チャン」となったと考えられる。「シャン」より「チャン」がスマートにひびく。

また現在中年の男女に最もよく使われる「サン」も、30年ほど前、すなわち昭和十年ころは、ごく限られた人しか言われなくて、相当に高い敬意だったという。さらに高い敬意をもって言われたのが、「とらひツアマ」「げんさくサマ」「うめのサマ」「おつきサマ」のように言われた「サマ」である。「サマ」は昔の地主(数戸)の主人(男女)に対しては、どんな人も使ったという。現在はそれらのはっきりした区別はみられない。

一方、「ドン」「ジョ」は、この今村では、中年以上の人によく使われる。「ドン」は男子に、「ジョ」は女子につけられる敬称である。これもさきの老女の話を聞いていううちにわかったことだが、孫のいるような老人の夫婦の敬称は「○○ドン」「○○ジョ」がほとんどであるのに、中年の夫婦になると「○○ドン」(注・男の敬称)「○○サン」(注・女の敬称)である。この中年の女主人に「○○ジョ」と言われるのは、ごく稀である。また、中年の夫婦には男女とも「○○サン」と言われるほうがいくらか多い。

以上のようにみていくと、敬称の寿命とともに、その交代による敬意の高低が変化していることがわかる。現在の「チャン」「サン」「ドン」「ジョ」などは、この後どのようになるであろうか。「ド

ン」「ジョ」はかなり古くなった言いかたであるから、だんだん少なくなるとは思う。 「チャン」「サン」が、ますます盛んに使われるようになると思われ。

### 結 論

以上、方言人の自然対話をとおして、敬意表現をみてきた。

敬意表現は、実に範囲も広く複雑である。ここに述べたものは、ほんの一部にすぎないが、延べ数十日間の観察の結果をみても、意味の深さや、表現法に、全体としてのまとまりが強く形成されていることに気付く。

土地人の敬語意識は、昔ほどは強くなくても、かなり高い。老人と若い層に敬語意識が大きくへだたっていることがわかる。今後はどのように落ち着くのであろうか。

敬語の多少からいうと、国語(日本語)としては普通であろうか。敬語に多くの異形と考えられるものはあまりない。あることは受け入れられると、そのままの形が、深く広くおこなわれるという、当方言の特性らしいものがあるようである。

本稿の意義は、当方言の敬意表現実態を観察し把握することによって、日本語敬意表現法に占める位置を認識することにあると思ふ。今後はさらに敬意表現のあるべき姿をみつめるべく、研究が発展されなければならない。

### 参 考 文 献

○方言学  
○方言と方言学

藤原 与一  
東條 操

○熊本方言の研究

原田 芳起

○熊本県方言風土記

田中 正行

○天草の方言

天草国語研究会編  
山口 修

○敬語法(日本文法講座1、総編)

石坂 正藏

○九州琉球方言熊本の部(方言学講座第四卷)

秋山 正次

○文法から見た方言と共通語

藤原 与一

△国語文法講座1、国語文法の展望

○周防錦町宇佐方言における

神鳥 武彦

述部の敬態表現(国語学50)